



◎英国聖公会宣教師協会から派遣されたイギリス人宣教師が、大阪に開設した男子校をルーツとする。難関国公立大・医歯薬系大を目指す「S英数」、難関国公立大を目指す「英数」、国公立大・難関私立大を目指す「文理」(\*)、短期・長期の留学を課す「国際」、6年一貫の「一貫」の計5コースを設置。生徒一人ひとりを尊重する教育を行う。

<b>設立</b>	1884(明治17)年
<b>形態</b>	全日制／普通科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約500人
<b>10年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立大は、北海道大、筑波大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大などに計118人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、立命館大、同志社大、関西大、関西学院大、甲南大などに延べ1159人が合格。
<b>住所</b>	〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町3-1-64
<b>電話</b>	06-6621-1181
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.momoyamagakuin-h.ed.jp/">http://www.momoyamagakuin-h.ed.jp/</a>

大阪府・私立  
**桃山学院中学・高校**

学校改革

# 「M1プロジェクト」で 全校指導体制を強化し 国公立合格者が3倍に

変革のステップ

背景

◎1980年代から進学実績が不安定に。新コースの設置などの改革を行うが、抜本的な解決には至らなかった

実践

◎進路指導の体系化や、学年縦断でコースごとに行う会議の導入、模試の活用で、学校の組織力向上を図る

成果

◎学年・コースを超えて進路指導に当たる体制が確立。進学実績も国公立大合格者数が2年間で3倍になる

教師の意識改革の壁から  
大学進学実績が低迷

桃山学院中学・高校は、大阪府内屈指の伝統校である。自由な校風と、一人ひとりの個性を尊重した教育により、中学校や保護者から厚い信頼を得てきた。

伝統と校風もさることながら、長らく同校の信頼を支えてきたのは堅調な進学実績だ。30年ほど前までは大阪でも有数の進学実績を誇り、卒業生は母校の大学入試結果が新聞に公表されるのを楽しみにしているほどだった。ところが、1980年代から進学実績が不安定になり始める。他の私立校が大学入試に対応したカリキュラムを整えて進学実績を上げる中、同校は自由な校風を重んじる風潮から、入試に対応したカリキュラム編成が十分になされずにいた。

こうした危機感から、87年度に難関国公立大合格を目指す「英数コース」、2001年度に短期・長期の留学を課す共学の「国際コース」を新設した。しかし、難関私立大文系を中心に進学実績は伸びたものの、国公立大の現役合格率の向上までには至らなかった。同校の卒業生でもある田中栄司先生は次のように述べる。

「進学実績が低迷したのは、受験に対する教師の意識変革が統一的に出来ていなかったからだと思います。教師の中には生徒の自由と平等を強く主張する先生もいて、英数コ

\*文理コースは2011年度からの新名称で、2010年度までは標準コースとなっている

「コースでは授業時間をあまり増やせませんでした。公平性を重んじるあまり、せっかくの制度改革も機能せず、進学実績の顕著な向上に



桃山学院中学・高校校長  
**温井史朗** Nakuhi Shiro  
教職歴36年。同校に赴任して37年目。「今日の前  
にいる生徒を大切にしたい」



桃山学院中学・高校  
**上田信夫** Ueda Nobuo  
教職歴34年。同校に赴任して33年目。進路指導  
部長。「生きる意欲、元気を心が進路を拓く。生  
涯、学習、生涯、成長」



桃山学院中学・高校  
**田中栄司** Tanaka Eiji  
教職歴27年。同校に赴任して28年目。3学年担任  
「人は人を旅する」



桃山学院中学・高校  
**山田秀雄** Yamada Hideo  
教職歴19年。同校に赴任して18年目。中学校学  
年主任代表。「モットーは『気合』」



桃山学院中学・高校  
**吉野谷治** Yoshinoya Osamu  
教職歴18年。同校に赴任して4年目。進路指導部  
「生徒も自分自身も楽しくなるような授業をした  
い」



桃山学院中学・高校  
**小川謙太郎** Ogawa Kentaro  
教職歴6年。同校に赴任して7年目。標準コー  
ス担任。「モットーは『God First!』」

は結び付かなかったのです」

## 「M1プロジェクト」で 「日本一」の学校を目指す

そうした状況を打開しようと、同校は08年度、中高一貫校化に踏み切った。当時の様子を進路指導部長の上田信夫先生は次のように語る。

「コース制導入の経験から、ただ制度を整えるのではなく、どのような生徒を育てたいのか、そして、目標を達成するために教師がいかに関与し、手を掛けていくかが重要であると感ずるようになっていました」

手厚い指導の結果の一つである大学進学実績を向上させたい。しかも、生徒の個性を尊重する桃山学院の良さを残しながら――。

こうした教師の思いから、06年度に立ち上げたのが「M1プロジェクト」だ。「M1」には桃山学院をナンバー1の学校にしたいという願いが込められている。プロジェクトを主導する温井史朗校長は、次のように述べる。

「本校の良さを残しつつ、進学実績も高めていくというのが改革の大前提にありました。教育を行う上で何よりも大切なことは、生徒の人間性を高めることです。難関大合格だけで終わるのではなく、人間関係を構築できる力や自己管理する力といった人格面も含め、総合的な力を高めていきたいと思っています」

ます。そして、すべての生徒が『桃山学院は日本一の学校』と思えるような学校にすることが『M1プロジェクト』の最大の狙いです」

## 学習にも行事にも 全力で取り組む姿勢を養う

「M1プロジェクト」の柱は、生徒の学力保障と教師の指導力向上だ。

学力向上策の一環としては、07年度に「自習ステージ」を始めた。月曜～金曜の放課後に90分×2コマ分、生徒が各自、自習室で宿題や予習に取り組みむというもの。英数コース、S英数コースの生徒は全員参加が原則だ。学校全体で切磋琢磨する雰囲気をつくり、家庭学習習慣が不十分な生徒には、まず机に向かわせる習慣を付けるのが狙いだ。

同じく月曜～金曜の放課後には、同校の教師または外部講師による希望者選択講座「M1ゼミ」、基礎学力の定着を目的として成績下位層を指名して行う補習「Rゼミ」など、学力レベルや志望に応じた学びの機会を提供した。

学習機会を増やす一方、学校行事にも全力で取り組ませている。それは、全人教育の伝統を守りたいという教師たちの心意気である。

「偏差値などの数値として見える力も重要ですが、社会で活躍する力を身に付けさせるためには、学校行事やクラブ活動を通して培

われる『目に見えない力』も大切です。仲間と協力する経験を積む一方、意見が対立し、葛藤することもあるでしょう。自分の責任を果たし、仲間を信頼する大切さも身をもって学ぶかもしれません。そうしたさまざまな経験が、見えない底力となつて蓄積されていくのです」(温井校長)

行事に思い切り打ち込めるのも、成績が下がってきたら、すぐに教師全体で支援するという意識が共有されているからだ。中学校学年主任代表の山田秀雄先生は次のように話す。

「中学1年生が初めて受けた模試で、英語の成績が思うほど良くなかったことがありました。その時は、他教科の先生も協力して、急きょ英語の特別補習を行いました。遊ぶ時は遊ぶ、学ぶ時は学ぶという意識は、生徒と教師双方に浸透していると思います。ただ学力を上げることだけが学校の役割ではありません。人間力と学力をバランス良く育む必要があります」

## コースごとの会議で学年と教科を 超えて意思疎通を図る

単に学習機会を増やすだけでは、東京大・京大といった超難関大合格は難しい。「1ランク上」を目指すには、さまざまな課題を乗り越えて進路指導力を強化することが急務であつ

た。07年度に赴任した吉野谷治先生は当時を次のように振り返る。

「赴任当時、改革に対する先生方の熱意を感じる一方、進路指導のノウハウが確立されていないと感じました。中には、進学実績を高めるには教科指導力さえ高めればよいと考えている先生もいました。しかし、教科指導の充実だけでは、東京大のような超難関大の合格を手にすることは出来ません。なぜ大学に行くのか、どのような進路に進みたいのかということを生徒に考えさせ、努力する決意を固めさせた上で、その志望を実現するために学力を高めていく。そうした進路指導の型を確立し、先生方の足並みを揃える必要があると考えました」

当時の進路指導は、各担任と学年に任せられ、学校としてのノウハウが継承されにくかった。そこで、進路指導部長主導の下、3年間を見通した進路指導の体系化に着手した。進路指導部が各学年の行事や取り組みを洗い出し、意義を見直した上で、面談や校内実力テスト、進路行事の時期を精査した。それを職員会議に諮って各教師から意見を聞き、進路指導部で再度練り直すという作業を繰り返した。そして、1年間をかけて完成にこぎつけた。

進路指導の体系化と並行して、学年間の意思疎通も強化した。S英数、英数、標準、国際のコースごとに1〜3年次の教師が集まり、指導

## 「大学研究」で視野を広げる

進学実績を高めるためには、生徒の進路意識を醸成することが欠かせない。進路意識を高めるために、同校が活用するのが2年生3学期に行う「大学研究」である。

大学研究といえば、通常、その時点における生徒自身の志望校について調べる場合が多い。しかし、同校では、35〜40大学の中から、本人の志望とは関係なく1人1大学を割り振り、学部構成や代表的な学部・学科の紹介、取得可能な資格やサークルなどについて調べさせる。調べる大学は、これまで生徒の志望先に挙げられてきた国公立大の中から教師が選定し、各生徒にはその中からくじ引きなどで割り当てる。

「大学研究」の狙いは2点ある。一つは、「調べ方」を身に付け、実際に志望校を絞り込む際に自分で大学調べを出来るようにしておくこと。もう一つは、ランダムに大学を割り当てることで、それまで知らなかった大学や学問分野の魅力に気付かせることだ。大学研究で調べた学部と同じ学問系統の学部・学科を進路先に選ぶ生徒も多いという。未知の分野へ視野を広げる上でも、「大学研究」は一定の成果を挙げているようだ。

方針の確認や情報共有を行う会議を始めた。

「職員会議などの大きな会議はもちろん大切ですが、井戸端会議のようなものが校内の各所で行われていることも、学校の活性化を図る上で重要です。先生方が自由に言い合える雰囲気、刺激し合う場があることが、学校の底力に結び付くと思います」(温井校長)

この会議は、10年度までは不定期に行われていたが、11年度からは「コース会議」として時間割に組み込んで定期的に時間を確保し、月2

回のペースで実施する予定だ。

## 模試の分析を通し 教科を超えてノウハウを共有

教科指導力の向上については、外部模試が重要な役割を果たしている。

「本校では、長年にわたって教師自作の校内実力テストを行ってきました。しかし、大入試が多様化・複雑化するにつれ、生徒の学力を全国レベルで把握する必要性が出てきたのです。自分の学力が全国ではどの位置にあるのかを知ることが、生徒自身のモチベーションを上げることにもつながりました。そこで順次、外部模試に切り替えていきました」  
(上田先生)

模試の結果が出ると、まず外部模試の担当者が分析を述べ、その後、コースごとに会議を開いて、コースの教師全員で分析する。結果が思わしくなかった教科については、学年・教科の枠を超えて話し合う。標準コース担任の小川謙太郎先生はこの分析こそが重要だと話す。

「普段から意見を出し合っているため、他教科についても率直に意見が言い合える雰囲気があります。数学科の先生が英語科の先生に生徒をうまく学習に向かわせる方法についてアドバイスをしたり、英語科の先生が国語科の先生と文章読解のノウハウについて意見

を共有したりしています。先輩と後輩の別なく、自由に言い合えるところが本校の強みだと思います」

模試活用は、推薦入試に対する方針を検討する契機にもなった。同校では標準コースを中心に指定校推薦入試を利用する生徒が多く、定期考査さえ頑張ればよいと考える生徒もいた。

「効率的に大学に合格しようと、定期考査対策のみを行い、継続して学習する習慣がない生徒が見受けられる状況でした。そうした生徒が大学の授業についていけないはずがありません。模試を行うごとに、本校の生徒の実態が浮かび上がってきたのです。そこで、大入試をゴールにするのではなく、5教科から逃げずに努力できる生徒の育成を標準コースの柱としたのです」(小川先生)

この方針の下、標準コースでは1年生から面談や保護者会を通して、生徒や保護者に繰り返し基礎学力定着の必要性を述べ、日常の学習がいかに大切かを説いた。その結果、入学時は指定校推薦を視野に入れていた生徒や保護者も、2学期には「一般入試に向けて一生懸命勉強する」という意識を持つようになった。

## 生徒が自ら学びに向かう姿勢を 身に付けさせたい

同校では、進路先が決まった生徒でも、3年

生の12月まで毎日放課後、自習に取り組ませる。これは学年主任が担当し、難関大の一般入試問題に取り組ませたり、資格取得の勉強をさせたりしている。

「自分は合格したのだから他の生徒は関係ない」という意識では、学年の一体感を生まれません。本校が伝統的に大切にしてきたのは、人間教育です。生徒を人としてどのように育てていくのかということが一番に考えているからこそ、先生方が一致団結して粘り強く指導に当たれるのです」(吉野谷合先生)

学校としての組織力の高まりと、生徒への手厚い指導の成果は、進学実績にも表れた。08年度入試では41人だった国公立大合格者が、09年度入試では74人に、10年度入試では118人に増えた(すべて現浪計)。更に10年度入試では、数年ぶりに東京大と京大の合格者が出た。

「今後の課題は、生徒が今以上に前向きに学習に向かえるよう意識を高めていくことです。英数コースの『自習ステージ』は、現在、義務的に取り組ませているのが実態です。生徒が自分で勉強の意義を見だし、自ら学習に取り組まなければ、真の学力は身に付きません。一連の改革により、先生たちの間に主体的に指導改善をする機運が高まっています。生徒が夢に向かって一途に頑張れるよう、指導力を更に高めていきたいと思います」(上田先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2009年10月号指導変革の軌跡「大阪府・私立追手門学院中学校・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)